

サイエンス本に手が伸びた



経済財政委員長
 明治安田生命保険特別顧問

すずきのぶや
鈴木 伸弥

読書がもたらす没入感、例えば物語性にどっぷり浸る時間などは本の楽しみの一つであるが、「ほう、こんなことになっているのか」という驚きも堪えられない。最近手にした(または画面越しで目にした)サイエンス本から幾つかを紹介したい。

科学の世界には、既知の未知や未知の未知があふれ、その時点の知の到達点を知らせてくれる人たちがいる。宇宙やデジタル、そしてバイオが題材のものによく手を伸ばすが、とりわけ「起源」の匂いのする書評に弱い。例えば、生き物由来では、カンブリア紀の爆発的な進化とともに語られる『眼の誕生』、一個の細胞からヒトとなる過程を追う『人体はこうしてつくられる』、古代DNAから解き明かす『人類の起源』などである。

仕事の合間のリフレッシュだから、読み方は、「プロすぎる記述はスルーしてわかった気分になる」ことが大切と心得ている。そのせいか、基礎や背景をたどり直すことがある。

シッタールタ・ムカジーの3部作『病の皇帝「がん」に挑む』『遺伝子』『細胞』の後に、『生命とは何か』を読んだ際がそれだった。『生命とは何か』は分子生物学の源ともいわれ、多くの研究者をこの分野に引き寄せたとされる。どうみても細胞が主題のムカジー3部作に先立つ。

著者は、物理学者のエルヴィン・シュレーディンガー。400人余りを前にした1943年の講演が基になっている。この中で遺伝子の構造をめぐる予想が語られるのだが、10年後の1953年、本書に啓発されたジェームズ・ワトソン、フランシス・クリックによって二重らせ

ん構造のDNA分子模型が明らかにされる。

著者の予想は、物理学者らしく遺伝子の大きさとそこに含まれる原子の数の推定から始まる。それにより、比較的小数個の原子からなると推論するが、遺伝子のロバストネスを考慮すると、規則的で法則性のある働きをすめる、奇跡に近い永続性を持つ構造ではないかと洞察を深めていく。加えて、突然変異は量子飛躍によるのではなか、と何とも魅惑的なアイデアを示す。

さらに興味ももう一つ。量子力学でのノーベリストがなぜに専門外へのチャレンジなのか。

そこで読み返してみた。なんと「前書き」に「事実や理論の知識が若干不完全だとしても、物笑いの種になる危険を冒しても、諸々の事実や理論を総合すべき」とあるではないか。

わが不覚はさて置き、物笑いを覚悟するまでの種は、世の中にそうは転がっていない。出くわして拾いに行く際には思い起こしたい一節である。もちろん、磨き上げた専門性と多様性が前提になろうが。

『生命とは何か 物理的にみた生細胞』

(著) : エルヴィン・シュレーディンガー / 岩波文庫

『眼の誕生 カンブリア紀大進化の謎を解く』

(著) : アンドリュウ・バーカー / 草思社

『人体はこうしてつくられる』

ひとつの細胞から始まったわたしたち

(著) : ジェイミー・A. デイヴィス / 紀伊國屋書店

『人類の起源 古代DNAが語るホモ・サピエンスの「大なる旅」』

(著) : 篠田謙一 / 中公新書

『病の皇帝「がん」に挑む 人類4000年の苦闘(上・下)』

『遺伝子 親密なる人類史(上・下)』

『細胞 生命と医療の本質を探る(上・下)』

(著) : シッタールタ・ムカジー / 早川書房